特集：大学におけるすぐれた授業とはなにか

趣　　旨

今日、大学教育のあり方が改めて関われている。学生の学力や勉学目的などが多様化している中で、学生の勉学意欲を引き出し、社会に有為な人材に育て上げるために、いかに教育の質を高めるかが問題とされている。教育の質という場合、その内容は多様であろうが、結局のところ日々の授業をいかによいものにするかにつきる。

改めて言うまでもなく、大学は研究の場であると同時に教育の場でもある。バランスをとりながら、いかに両者をともに実現していくかが大学の責務である。研究と教育とはしばしば対立的な要素と考えられているが、本来的には両者は不可分の関係にある。すぐれた教育はすぐれた研究から生まれるはずであるし、その逆もまた然りであろう。それは理想にすぎず実現は困難ないし無理、というとらえ方が一部の大学関係者の聞であるとしても、それが大学の本来の姿であろう。その前提をあいまいにすると、教育は研究の妨げであり負担でしかないとか、研究のためには教育を犠牲にしてもやむをえないということになりかねない。

しかし、大学に所属する研究者にとって、授業はもっとも重要な職務の一つであり、そこから逃れることはできない。そうである以上、授業を苦役や負担などととらえるよりも、学生にもまた教員本人にとっても有益になるような授業を行いたいし、楽しいものにしたいと考える方が生産的である。事実、名古屋大学に限らず大学に所属するほとんどの教員は、そのような意識をもって日々の授業を行っているはずであるし、またそれなりの努力も行っているはずで、ある。

けれども、いかによい授業を行いたいと思っても、それだけでは

よい授業を行うことは難しい。それなりの知識やノウハウ、努力や準備などが必要である。大学の教員のほとんどは教育学や教育内容・授業研究等を専門としていないし、また授業の特別の技法を持っているわけでもない。そのような、いわばごく普通の教員がすぐれた授業を行うためには、どのような工夫や配慮・用意が必要なのだろうか。それぞれの教員は、手探りの状態で授業改善に取り組んでいるのが実情であろう。その取組を通じて得た成果を個人のものに限定するのではなく、オープンな議論を重ねることにより普遍的な内容にすること、そして多くの教員が共有できるようにすることが、いま強く求められている。本特集では、こうした状況にこたえるために、大学におけるすぐれた授業のあり方、とくに学士課程の教育に焦点をあてて考察することとした。

考察の直接対象として、全学教育の中から全学基礎科目である基礎セミナーを選択した。この科目は、読み、書き、話す能力のかん養を図るとともに、真理探究の方法とおもしろさを学ぶことを目的に、一クラスの受講者を12名に限定して丁寧な指導を行っており、全体的に学生の評価も高い授業である。その中でもとりわけ高い評価を受けている授業の担当者である5人の教員に、ご自身の授業の概要を紹介いただくとともに、すぐれた授業を行うための条件、教員に求められる努力・工夫等についての考えを展開していただいた。また、5人の方々に高等教育研究センターのスタッフが加わって、すぐれた授業とはなにか、その実現に必要な条件や工夫等について討論を行った。

ご協力いただいた方々に感謝するとともに、本特集が授業改善のための全学的な議論を行うための一つの契機になることを期待したい。

編集委員長　夏目達也